

《書評》

戦時経験の脱神話化

——渡辺和行『ナチ占領下のフランス—沈黙・抵抗・協力—』を読んで——

森 本 哲 郎

I

第二次大戦終結五〇年。この戦争の意味を冷静に考えるのに必要な時間距離がようやく得られたと考えるべきか、まだそうではないと考えるべきか。ともあれ、フランスでは戦後を覆って来た様々な「神話」が色あせ始め、戦時下（ドイツ占領下）の経験を「神話」抜きで、直視しようという空気がようやく広まり、それがこの時期に関する近年の研究の進展となって現れてきた。本書は、このようなフランス本国での最新の研究成果に依拠しつつ、日本では十分に知られているとは言えない占領期フランスを、「あったがまま」（「あとがき」p. 276）に描こうとしたものである。一般読者を第一に対象とした「選書」（講談社選書メチエ）の一冊として出されたものだが、巻末の引用注や索引の作り方を取ってみても、準学術書としても読めるような配慮がなされており、本稿でも、そういうものとして書評の対象にしたい。

II

本書の内容を順を追って簡単に見てみよう。ミネラル・ウォーターを飲もうとして瓶を手にとった警察署長が、そこに「ヴィン—水」（産地の表示にすぎないが）のラベルが貼られているのを見て思わず投げ捨てる。映画『カサブランカ』のこのラストシー

ンから始まる「第一章忘却のベール」では、占領下フランス（ヴィシー時代）の戦争犯罪に対して一九九〇年前後に降行われた裁判をめぐる出来事が記述され、これに続いて、近年、この時代を相対化し、客観的に見ようという空気がフランス本国で出て来たことが指摘される。「フランス人全員が抵抗派であったかのような肯定的な神話の時代も、その逆にフランス人全員が協力派であったかのような否定的な神話の時代も終わり、冷静にこの時代が振りかえられるようになった」（p. 16）ということである。ただ、この点で感想めいたものを述べさせてもらえば、この双方の神話のうち、圧倒的に戦後フランスを支配して来たのは、前者の肯定的神話であって、後者は一部の研究者（それも主にアメリカ・イギリス系の研究者）の間での——有力ではあるが——少数意見であった（したがって「神話」までにはならなかった）のではないかとの印象をもつ。本書での「神話」の説明が前者についての説明になっているのも、その証左ではないだろうか。

また「ヴィシーの四年間をととして政党の再編がなされた。……戦後直後には、右翼独立派を除いて保守層が投票しうる政党はなかった。ドゴールのもとに保守政党が糾合されてフランス人民連合が誕生するまで、右翼勢力は屏息を強いられたのである」（p. 20）という指摘は全体的に適切だが、あえて望むならば、ここで中道政党であった（が、伝統的な左翼—右翼の二分法では右翼に入る）「人民共和運動（MRP）」には触れておいてもよかったのではないだろうか。レジスタンスに参加したキリスト教民主主義者によって結成されたこの党は、旧来の保守政党が正統性を失ってしまったなかで、ゴースト党の出現まで保守有権者の支持を一身に集めることができた政党であり、第四共和制のとくに初期に大きな役割を果たした後、勢力を衰退させて行った。イタリア、ドイツでは戦後一貫して、保守政党（保守中道政党）の中核をキリスト教民主政党が占めることができたのに、それらよりも当初は勢力の大きかったフランスの同輩がこのような運命をたどったのは、フランスの戦後政治史を考えるうえで興味深いからである。

続く「第二章第二次大戦前夜」は、本書全体にとっては「前史」にあたる部分だが、私にとっては、最も興味深く読んだ部分の一つであった。特に軍事をめぐる記述は重要だと思えた。欧語文献だけではなく、日本語文献にも依拠して書かれているところから見ると、日本でも知られていないわけではないようだが、日本の西洋史やフランス史の概説書などでは無視されがちな領域であるだけに、この問題に丁寧に触れているのは寄与するところが大きい。重要な指摘をいくつか引用しておこう。「マジノ線に象徴

されるように、戦間期フランスの防衛政策の基本は防衛中心主義である」「防御戦略には、戦間期フランスの老人支配や退嬰主義の欠陥がよくあらわれている」「フランス陸軍は、一九一八年の勝利の思い出に縛られていた。彼らは新しい軍隊を創出する代わりに、旧式の軍隊を強化したのである」(pp. 30, 31)。この退嬰主義はまず参謀本部をはじめとする軍に染み付いていた。と同時にフランス社会そのものがそうであった。「攻撃戦略は周到な計画と何よりも物量の優位を必要とするが、当時のフランスでは一九二八年から三五年まで兵役一年制が取られていたように、反戦平和や厭戦ムードが強く」(p. 32)、「機甲部隊による攻勢的な戦略思想」を唱えたドゴールは「荒野に呼ばれる者」のごとくであった(pp. 32-33)。

しかしまた、フランス国民のこの反戦平和・戦争回避の空気も、その結晶化とも言えるミュンヘン協定後のドイツの一層の侵略行為を前にして、「戦争も止むなし」の声に席を譲り、一九三九年七月の世論調査で、「ドイツがダンツィヒ自由港を奪おうとするなら、われわれは力ずくでもそれを阻止すべきか」という質問に、「いいえ」と答えた人は一七％にすぎず、七六％が「はい」と答えていた、という部分(p. 43)を読むとき、フランス国民は健全であったと思わざるをえない。しかも、一九三九年と言えば、第一次大戦による空前の惨禍からわずか二〇年後である。第一次大戦でのフランスの死者・行方不明者は一三〇万人以上で、第二次大戦での四倍にも上っている。この大戦での敗戦国ドイツが、本国は直接戦火を受けず無傷で残ったのに対して、戦勝国フランスは国土の重要部分(北フランス)が地上戦の舞台となったり、占領下におかれて——占領地の鉱工業施設は撤退時にドイツ軍による徹底的な破壊工作を受けた——、悲惨な体験をしたのである。二〇年と言えば、まだ一代を経過していない。このことを考えれば、フランス国民の「力づくでも阻止する」というこの決意は健気と言うべきである。⁽²⁾

さて「第三章ヴィシー体制」から直接本書の主題に入るわけだが、この章では、フランスの降伏、ヴィシー政権誕生の経緯、ヴィシー体制の制度・時期区分・指導者が描かれ、ペタンの唱えたいわゆる「国民革命」の実態、ヴィシー体制崩壊の過程、そしてドイツ占領下のパリの生活が手際よく描写されるとともに、妥当な判断が与えられる。例えば、ペタンの対独協力政権つまりヴィシー政権の成立について、「秩序をもたらししてくれるものであれば、人びとは何でも喜んで受け入れるだろう。無秩序に対する恐怖こそペタン元帥への支持の動因であった」(p. 70)という記述などがそうである。また占領下パリの市民生活を描いた箇所では、「一九四二年の春からイギリス軍による空襲が激しさを増すが、フランス人は、命がけでドイツの哨戒線を突破して来るイギリス

空軍飛行士に共感を覚えると同時に、その飛行士が落とす爆弾によって多くのフランス人が死んでゆくことに対して、複雑な気持ちにならざるをえない」(p. 118)とあるのを読み、また「[おそらく占領軍諸機関への就職という動機からであろうが]市民の間にドイツ語熱が高まってドイツ語を学ぶ学生が一九四三年まで増加の途であった」(ibid.)ことを知るとき、占領下の普通の人々の心境に読者も複雑な思いを抱かざるを得ない。さらに占領下パリでの密告の奨励(占領軍は密告に一〇〇フラン払ったという)——同棲中の男性の父親によって密告されたユダヤ系の女性、生徒の密告で拘引された中学のドイツ語教師の例——、高値で買ってくれる占領軍にしか売らないパリ郊外の農婦の話など(pp. 122-123)、このような環境では珍しくもない、ごくありふれたことではあるが、快い気持ちは当然起きない。

なお本章ではヴィシー体制の文化・宗教・教育政策の紹介に力点が置かれ、それによってこの体制のイデオロギー的側面がよく分かる。これは本書のすぐれた特色である。(反面、同体制の政治経済学的側面の説明が少ないのは残念であるが、この点は後に触れる。)

次の「第四章対独協力」は本書の中心である。最初に対独協力主義者のいくつかの類型とグループが説明された後、最もおぞましい対独協力として「ユダヤ人狩り」の実態が詳しく描かれる。第一章の導入部で本書が紹介した、一九九〇年前後以降のフランスで見られた戦争犯罪者の逮捕・裁判をめぐるいくつかの事件の被告人、トゥヴィエ(対独協力の民兵団における情報担当指導者)、バルビー(ドイツ人、親衛隊中尉)、ブスケ(ヴィシー政府の警察長官——告訴後、パフォーマンスを狙う一市民により暗殺。ミッテランは彼と一九八六年まで交際があった)の直接容疑はいずれも「ユダヤ人狩り」に対する責任である(第一章参照)。この「ユダヤ人狩り」の部分は、評者自身がこれまでフランスでの実態についてよく知らなかったこともあったのかもしれないが、読んでいて胸を打たれた。おそらく日本ではほとんど知られていないと思われるだけに、是非読まれるべき部分である。

同時に興味を引かれたのは、ファシスト・イタリアが反ユダヤ主義とは無縁だったという指摘である。フランス南東部のイタリア占領地区がユダヤ人にとつての避難所だったとは、目から鱗が落ちる思いであった(pp. 139-140)。またユダヤ人といっても決して一枚岩ではなく、「何代も前からフランスに住みついていてフランス国籍の経済的に豊かなユダヤ人と、一九世紀末から二〇世紀にかけて東欧から移住してきた貧しいユダヤ人との間の階級的対立が存在」しており、「UGIF」(一九一四年に設立された

フランスの全ユダヤ人を代表する公的組織」の指導者は、東欧や外国籍のユダヤ人を優先的にナチスに引き渡したのである」(p. 141) という指摘も重要だと思ふ。

この後、「労働者狩り」(ドイツ本国での労働のためのフランス人労働者の募集・徴用——当初は志願制だったが、応募不足のため後に義務制すなわち「強制労働」となる)、ドイツに対する経済協力、さらに一部の「筋金入りの協力主義者」による軍事協力(政府レベルではなかった)と続き、本章の最後で、知識人・文化人とドイツ占領軍との関係がかなりの頁を割いて語られる。ヴィシー体制の文化面・イデオロギー面に力点を置いた本書の特色がここでもよく現れている。全体的に興味深かったが、一つだけ、占領下バリの市民生活の描写とつながる指摘を引いておこう。「親仏的なヘラー」(ドイツ宣伝隊中尉、検閲官)も、「われわれの所にやってきてフランス人を告発するフランス人の数の多いのにうんざり」するほどであった」(p. 167)。サン・テグジュペリの『戦う操縦士』は、ヘラーの検閲を通して刷り上がっていたにもかかわらず、「この著者は親ユダヤ派で反ドイツ派だと非難する密告文書」のため、発禁・在庫押収になってしまった(p. 168)。

第五章は「レジスタンス」である。「ドイツ占領軍に対するレジスタンスは、何よりも個々人の自発的な抵抗としてはじまった。……ロンドンの自由フランスといえども、最初は少数の亡命者の運動でしかなかった。本格的にレジスタンスを語りうるのは一九四三年以後のことである。……一九四三年になってはじめて、自然発生的かつ散発的であった国内の地下活動が統一され、軍事的効果をあげるまでになった。またこの時期、国内の抵抗運動と国外から抵抗を呼びかけるドゴールとの間に協力関係がつくりだされた。この意味で、一九四三年五月の全国抵抗評議会の成立は画期的である」(pp. 176-177) という簡潔かつ適切なレジスタンスの位置づけから始まる本章では、まずレジスタンスのこの二つの流れ、すなわち国内レジスタンスと国外レジスタンス(ドゴールの自由フランス)が、全国抵抗評議会(CNR)という形で統一されるまでの時期について、それぞれ興味深いエピソードを交えて、様々な角度から描かれ、それに続いてCNR結成以後が概観される。国内レジスタンスのところでは、本書の個性である文化人・知識人の生息の描写に力点が置かれる。

また、「少数の『選ばれた者』(サルトル)の運動としてのレジスタンスが成功するには、ヴィシー体制への幻想から冷めた多数の平均的フランス人の支持と協力があつたことも事実である。大きな抵抗を支えたのが、小さな取るに足りない抵抗の積み重ね

であった」(p. 197)と述べて『民衆の力』がもつ重要性に配慮しつつも、同時に、このような民心の変化が一九四二年後半以降、枢軸側が守勢に回ったことを人々が感じ取り始めたことによるもの(つまり「戦局の変化」によるもの)だということを示唆している(p. 198)のは、均衡の取れた判断として、大いに頷けるものである。安易に「民衆の力」を一方的に強調しないのはさすがである。ドゴールの自由フランスについては、ドゴールと連合国との関係が重要であるが、本書はこの点も要領よく概観している。また「自由フランスにとっても、国内のレジスタンス各派にとっても、植民地の独立という視点はまだなかった」(p. 205)という記述が見られる。本書では問題提起されているだけだが、重要な指摘である⁽³⁾。

そして「第六章解放」である。「1. 解放」では、「フランスの国土からドイツ軍を駆逐し、ドイツを敗北に追いこむという軍事的戦い」と「フランス政府を樹立する政治的戦い」が後者に重点を置いて描かれ、そして後者は、「国内的にはドゴール派とレジスタンス」[ここでは共産党が最大の影響力をもっていた]とのヘゲモニー争いであり、国際的には自由フランスと連合国との争い」(p. 218)と二つの争いの面から手際よく描かれる。叙述の本筋からは外れるかもしれないが、この節でも、次のような「非常時の中の日常性」を政治的軍事的重大事件の叙述の間に巧みに挿入する所に、評者は、著者の目の確かさを感じた。「バイユー」[Dデー後に解放され、ドゴールが戦いの継続を訴える演説を行った町]という裕福で静かな町、ノルマンディー上陸でも破壊から免れた町の住民のなかには、軍隊がとおり戦車が走るので眠れないと抗議する婦人や、十フランの品物をドイツ人は二百フランで買ってくれたと不平をこぼす商人もいた。いつの時代にも利己的な人間はいるものである」(p. 224)。「戦い」[一九四四年八月のバリ蜂起によるレジスタンスとドイツ占領軍の戦い]から離れた地域では、セーヌの川べりで釣りをしている人や、水着で日光浴をしている青年たちも何人かいた。サン・ミッシェル大通りや警視庁の周囲で戦闘が続けられているのに、サン・ミッシェル橋のそばでいともんびりと水浴したり、日光浴をしていた青年たちもいた。シャイラーは、パリ占領直後に、セーヌの川辺で釣り糸を垂れる人を見て『ベルリン日記』に記した。「こればかりはバリの終わりの日まで、時の果てる日まで絶対に変わるまい……セーヌで釣りをする人の姿は」。まさにそのような情景が点描された。裏通りでは、子どもたちが石蹴りをして遊び、人びとがのんきなようすで散歩をしていた。日常生活とはかかるものであらう」(p. 229)。

「2. 肅清」では、解放直前期に、ドイツ占領軍と対独協力の「民兵団」がもたらした「惨劇」、そして解放直後の混乱の中で

解き放たれた「原初的な懲罰への衝動」による「暴力的決着（肅清）」が描かれる。「正規の裁判を経ずに約一万人が略式処刑されたが、このうちの半数が解放後の復讐行為のなかで行われた」（p. 233）。確かに「ドイツ軍人と恋愛関係にあったフランス女性を丸坊主にして嘲笑するシャリヴァリの行為（共同体による制裁行為）」（p. 236）は許容範囲の「復讐」だとしても、「トゥルーズのゲシュタポ指揮官の愛人であったジョゼット・アセマ」を軍法会議の結果、銃殺刑に処した（*ibid.*）のは肅清委員会の逸脱行為であろう。そしてこの独走・逸脱を抑えるためにドゴール政府によって、公式の特別裁判所が設けられたことが説明される。本書によれば、特別裁判所による審理件数一二万四千、死刑判決六七六三人、死刑執行七六七人であった。ただし、この肅清についても、「ヴィシー指導部が一律に肅清裁判にかけられたのではない点に、注意すべきである。ファシスト知識人と宣伝扇動家はバージされたが、専門家、実業家、官僚はほとんど無傷で生きのびた。ヴィシー外交官の三分の二が、第四共和政にも仕えた。知事は半数が入れ替わっただけである」（p. 236）。点に注意しなければならない。「フランスは再建のために、連合国に対処するために、公務員や企業家を必要とした」のであった（p. 237）。文学・芸術などの「虚学」に生きるものは「弱く」、「実学」に立つものは「強い」ということだが、この点も日本との本格的な比較を考えたい点である。

またヴィシー体制というタンデムの二人の漕ぎ手であった国家主席ペタンと副首相ラヴァル——一九四〇年一月〜四二年四月の間を除き政権の実力者であった——は、当然ながらともに死刑判決を受けた。しかしペタンが高齢を理由に最終的に終身禁固刑に減刑され、一九五一年まで生き延びたのに対して、ラヴァルの場合は裁判開始後一三日目に死刑が執行されるという早業であった。第一次大戦時の救国の英雄ペタン元帥には恩情がかけられた。しかし、社会主義者や労働組合員を主な顧客にする「赤いネクタイ」をした弁護士として有名になり、社会党左派として政界入りしたものの、その後右傾化を続け、「原理原則のない議事人」として評判になった（p. 74）。ラヴァルには一切の恩情が拒否されたのである。著者によれば、ラヴァルは「いわばヴィシー体制を葬り新しいレジームを聖別する象徴的行為」（p. 238）として処刑されたのである。このあたりの説明は、「過去を裁く裁判」が持つ政治的象徴性を事実にして示したものとして、評者は教えられるところが多かった。

この節の最後に「文学者と肅清」が描かれる。ヴィシー時代の文化的側面に力点の一つが置かれている本書の特色がここでもよく現れているが、記述が具体的でおもしろかった。ひとつだけ引いておこう。「文学の領域では、全国作家委員会が、ドイツ占領

軍に協力した作家のブラック・リストを作り、作品の発表を禁じ」ていた。この委員会は「共産党系の作家がイニシアティブを取」っており、「ルイ・アラゴンが中心的役割を演じ、彼の許可がなければ一行も印刷できない状態であった」。「しかし、アラゴンと伴侶のトリオレも、戦中の態度が首尾一貫していたとはいいたい。彼らは、地下出版によって作品を発表していたが、他方でガリマールやドノエルという検閲協定に署名した出版社から作品を出してもいた。……ドノエルは、アラゴンとトリオレに金銭面で用立ててやったこともあった。／アラゴンたちは状況を巧みに利用したという主張もなりたつが、彼らも関与していた地下出版の『フランス文学』が、検閲協定に署名した出版社を対独協力派であると、繰りかえし非難していたことを考えあわせると、アラゴンが文学者の肅清の先頭に立つ資格があったのか否かは、疑問なしとしない」(pp. 238-239)。

いずれにしても、文学活動を「裁く」ことは可能なのだろうか。対独協力的出版社から出したという「形式」ではなく、著者がボーヴォワールを援用して言うように「作品の内容によってこそ判断されるべき」(p. 240)というのは正論であろう。が、これにしても判断は難しい。著者自身紹介しているように、「後悔などは振り捨てて、現在の秩序に反抗し自己の自由を要求せよ、と主張するサルトルの戯曲『蠅』が……ドイツ占領軍向けの新聞『パリザー・ツァイトゥング』からも、地下運動の『フランス文学』からも賞賛されたことは、『蠅』が両様の解釈を許容したことを示すものであった」(p. 196)のだから。

その他、本章では、『ゲルニカ』の作者で「亡命者の保護者を任じ」、フランコのスペイン政府にとっては札付きのピカソが、(スペイン政府の圧力で作品の出版売却は禁じられたとは言え)ドイツ占領下のパリで亡命生活が続けることができたというのは、一つの驚きであった(p. 168)。フランスを「ゲルマン戦士たちの休息の場」(p. 81)にしようという「教養」ある占領軍高官たちの配慮の賜物だったのだろうか。

最後の「3. 再建」では、ドゴールとレジスタンス(共産党系)のヘゲモニー争いが前者の勝利へと収斂してゆく過程、そしてヴィシー体制の遺産が概観される。このなかで、秩序回復、ドゴール政権(共和国臨時政府)の正統性の確証のため、ドゴール自身が各地を凱旋行進したことに触れているが、評者はこの部分を読んで、戦後初期の日本で天皇自らが各地を巡幸することによって、新しい天皇制度(象徴天皇制)の正統性を確実なものにする営みを行ったことを思い起こした。

あと一つ、些細な点だが、ワルシャワ蜂起の説明の箇所(二七一頁の注15)で、「赤軍は到着せず、蜂起は無残な敗北を喫した」

とある。たしかに赤軍はワルシャワ市内には到着しなかったが、至近（ワルシャワ郊外ヴィスワ河畔）までは達しており、市内に突入できる力はあったにもかかわらず、軍事戦略のおよび、おそらく政治的動機によって、積極的な支援を行わず、蜂起した非共産系レジスタンスがドイツ占領軍によって鎮圧されるのを静観していた、という点が重要であると評者は考える。⁽⁴⁾

著者はドイツ占領下の四年間を次のように総括するが、適切な評価と言うべきである。「フランスの『存続』は沈黙した多数のおかげであったとしても、フランスの進路の選択は行動する少数者によって決定された。このようにドイツ占領期には、レジスタンスとコラボラシオンの道に積極的に関与した少数の人々の生活と、受動的に日常を生きた多数の人びとの生活があった。受動的な抵抗と受動的な協力の境はいまいであった。『あいまい性』こそヴィシー時代の本質であった」(p. 246)。

III

フランス本国（およびアメリカ、イギリス）での最新の研究成果を吸収し、また日本で書かれたこれまでの様々な蓄積をも丹念に参照して、⁽⁵⁾ ていねいに書かれ（ていねいさは、巻末の年表や索引の作り方にも現れている）、自ずから著者の人柄が伝わってくる本書は、非常に好感のもてる著書だと言える。適切な場所に適切な写真が多数入っているのも、一般読者を念頭に置いている以上、当然かも知れないが、本書を理解するうえで貴重である。私も、これを見てはじめて「こんな顔をしていたのか」と知った人物もあり、楽しかった。さらにヴィシーやレジスタンスをはじめこの戦争を背景とした映画（『カサブランカ』『リュシアン』の青春）『禁じられた遊び』等々）を切り口に議論を進めて行く手際（p. 67, 171, 8, 58 など）、また随所でヴィシー体制を生きた文学者の同時代的証言を巧みに用いて時代の相貌を浮かび上がらせている点などにも、本書の個性がよく出ていると思う。それと関連して、「一九四三年になると、熱戦によって溶かされた雪解け水に乗って東部戦線から朗報が伝えられた。」(p. 190)とか、「霧のロンドンでまかれた国家の種子は、北アフリカの陽光のもとで大きく成長する。」(p. 218)といった類いの「文学的表現」がしばしば見られ、これまた著者の個性を反映したものとして愉快な気持ちになる。

本書にはこのように多くの優れた点や特色があつて楽しく読むことができる。とは言え、世間の読者に「良書」を紹介することを目的とする一般誌紙（商業誌紙）の書評とは違い、このような学会誌（紀要雑誌）での書評はただ「誉め誉め」では役目が果た

せないで、最後にいくつか気づいた「問題点」を感想風に記しておきたい。ひとつは、ヴィシー体制下での経済政策のより具体的な内容と、それを生み出す具体的な仕組み（政策形成の過程とそれをもたらす制度構造）の説明が（一〇三—一〇六頁、一五〇—一五三頁に概観されているものの）あまり書かれていないことである。本書の最後の方で簡単に触れられているように（p. 236, 240）、戦後との連続性（政策形成・実行の仕組み、政策内容、そしてまた政策形成・実行の担い手の連続性）が、この領域で特に顕著だとすれば、この領域の叙述にも少し頁を割いてもよかつたのではなからうか。

二つ目として、この時期のフランスをとりまく国際関係に関する記述にも少し紙幅をとつてもよかつたのではないかと思う。とくにレジスタンス運動（国内国外双方）の役割を考えるにあたっては、連合諸国（アメリカ、イギリス、またソ連）とレジスタンス運動の間の政府・政治指導者レベルでの関係の理解は不可欠である。もちろん、慧眼の著者には何カ所かで「万事は戦局の推移にかかっていった」という趣旨の記述が見られるし（例えば、一八三頁）、この分野での説明もひととおり行っている。が、大局的に見れば、フランスの解放をもたらした基本的要因が「連合国の軍事力（を機軸とする力）によるドイツへの打撃と破壊」にあったことは事実であり、だとすれば、この点での記述がもう少しあつてもよかつたのではないだろうか。⁽⁶⁾

ともあれ、研究者の間ではともかく、一般には「レジスタンス」という面でのみ、しかも「悪IIドイツ占領軍、正義IIレジスタンスとそれに積極的に参加するフランス国民」という非常に一面化された図式でのイメージしかもたれていない戦時下のフランスの実相が、フランスよく、このようなよみやすい形で著されたことは、裨益するところが非常に大きい。外国の戦争経験に関するフランスの取れた理解が一般に広まることによって、日本の戦争経験もまた、フランスの取れた、広い視野の中で理解される可能性の高まることが期待される。フランスに関心をもつ読者とはもとより、日本の戦争経験について考えたい読者に対してこそ、本書の一読を強く薦めたい。

- (1) 参照、平瀬徹也「第二次大戦と民衆——大戦下フランス民衆の意識と行動——」（『歴史評論』四八四号、一九九〇年八月）三二頁。
- (2) 著者も戦間期の「いかなる犠牲を払っても平和を」という心理をもたらし第一次大戦による犠牲者の「統計的重さ」を指摘しているが（四一—四二頁）、一九四〇年六月の余りにあつけない降伏・休戦をフランス国民が歓迎したのも、それが誤った選択だったとは言え、以上のことを考えれば同情の余地はある。平瀬氏も言うように、「二世代の間に二度のホロコースト（大虐殺）を甘受させることは何れにせよ容易なことではなかつたのである」（平瀬、前掲論文、三七頁）。

(3) 先の大戦が、ヨーロッパ・アフリカ戦争とアジア・太平洋戦争という二つの戦争から構成されており、少なくとも後者における「戦争の争点」はヨーロッパの植民地主義だったとすれば、フランスは日本——日本はヨーロッパに代わってアジアの植民地帝国の支配者たらんとした——、イギリス、オランダといった植民地主義の同輩国とともに「敗者」であり、「勝者」は何よりもまずアジアの被植民地諸国（地域）、そしてまたアメリカであった（参照、クリストファー・ソーン「市川洋一訳」『太平洋戦争とは何だったのか』草思社、一九八九年）。

(4) 参照、伊東孝之『ポーランド現代史』（山川出版社、一九八八年、一七三頁以下）。

(5) 往々にして、日本の外国研究者は、それまでの日本語による成果（翻訳も含めて）を無視して、外国の最新の研究にのみ依拠する傾向があるが、本書はこの幣を免れている。日本での研究の蓄積という点から、このことの重要性を強調しておきたい。

(6) これに関連して、本書では引用されていないし、また政治指導者や政府の動き及び事件を軸とした古典的な「上からの外交史」の記述スタイルをとっているため、「社会史」「下からの歴史」が尊重される歴史学界ではあまり注目されていないようだが、山上正太郎『チャーチル、ド・ゴール・ルーズベルト——ある第二次世界大戦——』（社会思想社、一九八九年）は、この国際関係の側面に関して事実関係をかなり丹念に描いており、日本語で書かれた数少ない文献として参照する価値がある。例えば、先にも触れた「戦争の争点」としての植民地問題——植民地帝国の維持（・拡大）か脱植民地化か——に対する基本構想の違いが、ローズヴェルトとドゴールの対立の背後にあった重要な要因のひとつだったことを、山上は指摘している（一八〇—一八二頁、二〇三—二〇四頁）。つまりローズヴェルトの戦後構想が植民地帝国の解体（民族自決）——この点でチャーチルとも対立する——にあつたのに対して、ドゴールはあくまでフランス植民地帝国の復活を考えていたのである。ローズヴェルトが不覚にもスターリンに親近感を抱いてしまった理由の一つは、この点での対立が両者間にはなかったからである。

また山上によれば、ドゴールのアメリカ政府に対する反発のひとつの原因は、彼が、「屈辱的な一九四〇年フランスの敗北の因を、アメリカの対仏援助・支持の不足と考え」ていたためだという（一九一頁）。だとすれば、「フランス国民の責任を棚に上げて、他国政府を非難する」「身勝手な感情が、ドゴールの対米感情には交さっていることになる。ローズヴェルトに反感を催させ、チャーチルを苛立たせるドゴールの言動は、リソースの貧弱な中級国家が「大国」の地位を回復しようとするための必死の技（まさにアート）であることは、よく理解でき、それを行うドゴールを尊敬もするのだが、個人的には付き合いたくない人である。

* 講談社（講談社選書メチエ）、四六判、二八六頁、一九九四年二月。